

第 35 話：「勝敗をこえて、6 年生が教えてくれたこと」



2月23日に「みんなで走ろうフルマラソン」という、海田小学校の伝統行事が行われました。1年生から6年生まで1組と2組に分かれて、伝統のタスキをつなぎながら、マラソンと同じ距離の42.195kmを走るものです。私は、はじめのことばで、「第4コーナーを回り、ゴールが見えたとき最後の力をふりしぼって走りましょう」と全校児童に呼びかけました。箱根駅伝等でよく言われている「1秒を削り出せ」ではありませんが、1周200mのトラックを約211周しますから、全員が1秒速く走れば、チーム合計では211秒＝3分31秒、速くなる計算になります。

そして、8時30分に1年生がスタートしました。その後、2年生、3年生、4年生、5年生とタスキがつながっていきましたが、どの学年でも、走っている児童を応援する子どもたちの声が運動場に響き渡り、その応援にこたえようと苦しいながらも懸命に手を振る子どもたちとが一つのドラマをつくっているようでした。いよいよ6年生の走る番が来ました。これまで5回の「みんなで走ろうフルマラソン」を経験していますが、今年は特別です。それは、いつの年から始まったのかはわかりませんが、6年生は、最後に感動のシーンが待っているのです。

ところで、海田小学校の児童数は現在357名です。2チームに分かれて競い合いますので、単純に計算しますと178名と179名になります。これでは、30人あまり走者が足りません。その分6年生が余分に走るようになります。今年は、ほぼ全員が200mのトラックを2周走ってくれたようです。

時計が11時を回ったころ、ゴールの瞬間を見るために、全校の児童がトラックを取り囲み、一生懸命走る6年生に声援を送りました。最終ランナーが、“織田ポール”の前にさしかかったとき、恒例の感動のシーンがスタートしました。あらかじめスタンバイしていた6年生が最終ランナーの児童のすぐ内側を、応援しながら伴走していっしょにゴールしました。見ていた児童からも

大きな拍手が巻き起こりました。5年生は来年は自分たちが

感動のシーンを務めるんだと思ったかもしれません。今年はさらにサプライズがありました。まだゴールしていないチームの最終ランナーの伴走に、ゴールしたチームのメンバーも合流して、6年生全員でラストランを行っていました。学年全員で力を合わせて、学校を支えてきた仲間であり、「そこには勝者も敗者もない」と、走ることで教えてくれたように思いました。

